

84人犠牲の大川小、来春にも統合 「地域衰退早めた」

茂木克信 2016年10月10日07時28分



大川小旧校舎の周りにはかつて集落があった＝9日、石巻市釜谷



いまま大川小旧校舎を訪れる人は絶えない＝9日、石巻市釜谷

宮城県石巻市の北上川河口から約4キロ上流。車を揺らすほどの強風が吹く更地に、大川小学校の旧校舎がポツンと残る。9日も次々と見学者が訪れ、献花台や慰霊碑の前で手を合わせた。そして、津波に破壊された2階建ての「物言わぬ語り部」に言葉を失った。

5年と7カ月前。大川小は10メートルもの津波に襲われ、児童74人と教職員10人が犠牲となり、周りの集落も壊滅した。上流部に住む佐藤すえ子さん（42）は、6年生の長女未空（みく）さん（当時12）と3年生の長男択海（たくみ）君（当時9）を失った。



大津波警報が流れる中、児童らは地震発生から約50分間、校庭にとどまった。裏山まで歩いて数分。「山へ逃げよう」との声は児童や教員からも出ていた。それなのに……。

市は「津波は予想できなかった」と説明し、2013年2月にできた第三者検証委員会の1年にわたる調査でも、「50分間の謎」に迫りきれなかった。

児童の遺族54家族のうち19家族は14年3月、残された手段として、市と県を相手に裁判を起こした。すえ子さんも加わった。

■遊び相手はわずか

津波で地区の小学生の約7割が犠牲になった。生徒が20人に減った大川中は、13年3月に閉校。そろばん塾や学習塾、習字教室もなくなった。高齢化が進み、昨年4月にすえ子さんが授かった次男生望（いくみ）君の遊び相手になりそうな子は、近所にわずかしかなかった。

市は震災翌年、新たな校舎を別の場所に建てると決めた。だが昨年、別の小学校と統合すべきか、地域の488世帯にアンケートを行った。すえ子さんは友だちが多い方がいいと思い、「統合を望む」と答えた。震災前に108人いた児童数は今年5月時点で29人まで減った。統合候補の二俣小には92人もいる。

回答した317世帯の3分の2が統合を望んだ。小学生以下の子どもがいる世帯に限ると8割になった。市は、来年春にも統合する方針に変えた。

市は6月、住民がつくる大川地区復興協議会に統合方針を伝えた。大川小は住民の集いの場だった。協議会は、新校舎を住民の避難所や交流施設としても使えるようにして、地域再生につなげる考えだった。

説明会后、大槻幹夫会長（74）は疲れた顔で言った。「保護者が望むならば、やむなしだ。ただ、校名に大川を残してほしいという意見が多く出た。寂しさ、いや、抵抗なんだな」

大川地区は1955年に町村合併で旧河北町となるまで、大川村だった。震災を機に大川中、大川郵便局がなくなり、河北警察署の大川駐在所は地区外へ移った。

「大川の名が地図から消える」。そう口にする原告の遺族は、惨事が地域の衰退を早めたと考えた。

市は今年、協議会と保護者に対して再び説明会を開き、校名や統合時期について方針を伝える予定だ。

■4人、いまでも行方不明のまま

被災した旧校舎は今年3月、震災遺構としての保存が決まった。静かな慰霊を望む遺族からは「校舎前の慰霊碑を別の場所に移したい」との声も上がる。

慰霊碑には、児童の名前が教職員や住民たちと一緒に刻まれている。4人はいまでも行方不明で、父親らが重機で捜索を続けている。

あす11日は月命日。訴訟に参加した遺族、しなかった遺族。そして教職員の遺族たち。立場は違っても、それぞれが亡くした人を思い、心に痛みを感じ、胸の中で生きていると知る。

(茂木克信)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.